

昔話「桃太郎」の変転

——『再桃太郎昔語』の諸問題を中心に——
板

山 崎 舞

はじめに

昔話作品の一つ「桃太郎」は、現在では子ども向けの読み物としても広く認識されている。近代以降、演劇や唱歌などといった形態でもその存在を確立した「桃太郎」作品は、口承文学から始まり江戸期に入ると次第に本という形態で出版され、読み物として広まっていき、多くの時間を経て今日まで知られることとなった。この江戸期を境に数多くの桃太郎ものが現在まで刊行され続けられているのである。

本稿では、その中から比較的早い時期に絵本化され、なおかつ「再板」という角書があることから人気の程が伺え、また当時の文化や社会の影響を強く受けている作品でもあるという面を持つていることから『再桃太郎昔語』を取り上げる。そして、現在一

般的になつていている作品との比較や、これ以後の作品がどのような変化を遂げていったのかを明らかにしたい。その上で『再桃太郎昔語』の位置づけを考え、そこから考えられる諸問題について考察したい。

一 『再桃太郎昔語』書誌

まずは今日まで、索引、年表類に紹介された書誌をまとめておきたい。

・『補訂版 国書総目録』

桃太郎昔語 ももたろうむかしかたり 二巻 ④再板 ⑤黄
表紙 ⑥西村重信画 ⑦安永六刊 ⑧安永六版―大東急、刊
年不明―日比谷加賀

とあるもののうち、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵である。

・日本古典籍総合目録（国文学研究資料館データベース）

著作ID 51528

統一書名 桃太郎昔語（ももたろうむかしかたり）

巻冊 二巻

角書 再板

分類 黄表紙

著者 西村重信（石川豊信） 画

成立年 安永六刊

国書所在【版】（安永六版）大東急〈刊年不明〉日比谷加賀

著作種別 和古書

・『赤本黒本青本版心索引（予備版）』

太郎 再桃太郎昔語 上 鱗

・『改訂 日本小説書目年表』

記載なし

実際に原本を確認してみると、以下のようなことが確認できた。

【所蔵】東京都立中央図書館加賀文庫

【表紙】白色無地（後のもの）

【外題】「再桃太郎昔語」の書名は表紙裏の題箋による

【寸法】表紙・縦一七・五センチ×横一二・五センチより中本型

【柱刻題】の体裁で一〇十丁

【紙数】十丁

【著者・画者】西村重信（挿絵中の一オ「西村重信図」、十ウ「ゑし西村孫三良」による）

【冊数】一冊

【板元】鱗形屋

【刊年】刊年未詳

また、今回は確認できていないが、同タイトルで西村重信が描いた大東急文庫所蔵のものは刊年が安永六年であるため、特に異同がなければ加賀文庫版である本作も同年刊行であるという見方をすることもできると考える。

そして、本稿では『再桃太郎昔語』を赤本として扱うことにする。既に確認したとおりであるが、『補訂版 国書総目録』では黄表紙と分類されている。だが、本作を黄表紙と考えるには作中に書かれている言葉書きが少ないということが指摘できる。この詞書の量を見ると、黄表紙と断言することは難しいのではないだろうか。したがって、赤本に類されるのではないかと推測できる。

また、絵師である西村重信は享保後期から元文期に活躍した絵師である。本稿では、再板本を扱っているが、再板があるということは初版本があることはわかる。したがって、初版本である『桃

太郎昔語』がこの享保後期から元文期に描かれたものではないかと考えられる。この時期はちょうど赤本が刊行された時期でもあることから、本作は赤本ではないかと考えることができる。

では、なぜ『補訂版 国書総目録』は黄表紙と分類されたのだろうか。やはり、それは刊行年によるものだと考えられる。本作の刊行年は未詳であるが、初版本が元文頃までに書かれていたのではないかと推測は既に論じた通りである。その初版本である原本については、現在確認することはできない。しかし、再版本である本作の原本は確認することができる。したがって、再版本である本作が、「再板」という形で刊行されたのが黄表紙期であったということではないかと思われる。それゆえ、黄表紙と分類されているのではないかと判断できる。

この赤本と黄表紙の関係について内ヶ崎有里子氏は、「赤本の昔話絵本は、黄表紙期に至ってもそのままの版木で再板されていたものがあり、画作者や享受者たちの目に触れていた可能性が推測される」ということを指摘している¹⁾。この指摘からもわかるように、もともとは赤本であったものが後に再板されることによつて、黄表紙と類されたということが言える。そのように考えると分類的には黄表紙であれども、実際は本作のように赤本であるという作品も何作かあるのではないだろうか。

以上のようなことから、本稿では『再桃太郎昔語』を赤本と考えることとする。

では本作は一体どのような話となっており、以降「桃太郎」ものはどのように変化していったのだろうか。現在、一般的となっている作品との比較をしながら、それを紐解いていきたい。

二 『再桃太郎昔語』と現在伝わる「桃太郎」ものの比較

次に、現在一般的となっている「桃太郎」ものとは話の展開がどのように違うのか比較してみたい。ここでは全国学校図書館協議会選定「基本図書」、第二二回サンケイ児童出版文化賞受賞の松居直作『ももたろう』(二〇〇七年、福音館書店、第一〇九刷)をその対象として分析する。

太字は一方にしかみられない場面、記号を付しているものは共通場面、傍線を付しているものはそれぞれ違いがみられる場面である。このように違いが見られる箇所などがいくつかあるのだが、まず『再桃太郎昔語』(以降「再板」と略記する)では火鉢を囲んで昔語りをする場面から話が展開していくのである。これは、現在の話には見られない一つの特徴である。この場面は他の話にも見られる情景であり、当時の流行ではなかったかということが指摘されている²⁾。つまり、皆で囲んで話を聞いたり語り合ったりと

表一

『再桃太郎昔語』	『ももたろう』
火鉢を囲んで昔語り(二オ) [図1]	
◆桃を見つける(二ウ・二オ) [図2]	◆桃を見つける
桃を食べた爺・婆によつて桃太郎誕生(二ウ・三オ) [図3]	桃から桃太郎誕生
◆桃太郎が力強さ自慢(三ウ)をし、	◆桃太郎の力強さ
父母子が大仏餅、幾代餅作り(四オ)	からすが桃太郎に鬼の仕業を報告 きび団子を作る
◆犬・猿・雉をお供にする(四ウ・五オ) [図4]	◆犬・猿・雉をお供にする
山道を分け入った一行(五ウ)が鬼の城門へ到着(六オ)	山、谷、海を越え鬼が島へ到着
睨み合う鬼と桃太郎一行(六ウ・七オ)	鬼と対面し戦う
鬼と戦う(七ウ・八オ)	
鬼から宝物をもらう(八ウ・九オ)	鬼からお姫さまをかえしてもらう
宝を背負つてきた桃太郎が鬼が島から帰郷し、村人に会う(九ウ・十オ)	爺・婆のもとに帰る
両親のもとで桃太郎は打ち出の小槌から金銀を打ち出す。(十ウ)	

いうことが日常的に行われていたのではないだろうか。この点については、本稿での詳述はしないが、赤本を含め草双紙の享受の仕方といった点とも大きく関わってくることだと言える。

次に、傍線部(A)の桃太郎の誕生の仕方について見てみる(この誕生の仕方については、後述する)。まず、現在一般的となっている話は、桃から誕生するため、果物から生まれるという意味である果生譚と呼ばれるものになっていることがわかる。一方で『再板』では桃を食べたことによつて若返つた爺と婆によつて誕生する老人が若返るという意味である回春譚と呼ばれるものになっている。この誕生の仕方というのは大きな違いであり、「桃太郎」ものを考える上では重要な要素の一つである。

その後、鬼のもとへと向かう際に『ももたろう』では、からすが桃太郎に鬼の仕業を報告し、それを聞いた桃太郎が鬼が島へ向かうという展開になっている。しかし、『再板』ではそのようなことは描かれておらずいきなり鬼が島へ向かうという描かれ方になっている。その理由については、明らかではなくここで論じることとはできないが、何かあるのではないかと考えられる。

そして、傍線部(B)の鬼が島へ向かう桃太郎のために拵えている物についてであるが、現在では、きび団子を拵えそれをもとに犬・猿・雉をお供にする。しかし『再板』では大仏餅や幾代餅、

十団子といったものを桃太郎のために拵えそれを三匹のお供に与えている。これらの餅などは当時実際に存在したものである。『耳袋』巻一「両国橋幾世餅起立の事」によると「幾世餅は浅草御門内藤屋市郎兵衛方元祖にて、両国橋の方小松屋は元来橋本町辺住居せし軽き餅売りなりしが、新吉原町の遊女幾世といえるを妻として夫婦にて餅を拵え、毎朝両国橋へ持ち出し、菜市の者へ売り渡しける。」とあり、『東海道名所記』には「坂のあがり口に、茅屋四五家あり。家ごと、十団子をうる。其大さ、赤小豆ばかりにして。麻の緒につなぎ。いにしへハ、十粒を一連にしける故に。十団子といふならし。」と記されている⁽⁴⁾。これらから、当時人々が食べていたものであることが伺える。このように実際に存在するものを話の中に盛り込んでいることから、火鉢の場面を含め本作は当世化されている作品であることがわかる。

やがて鬼と戦った後、傍線部(D)にあるように『再板』では鬼から宝物をもらうという展開になっている。しかし『ももたろう』では、鬼がおわびのしるしとしてありつたけの宝物を差し出すと桃太郎は「たからものはいらん。おひめさまをかえせ」と言つて、宝物ではなくお姫さまを返してもらおうという展開になっている。その後は両者とも爺・婆のもとに帰るのだが『再板』では桃太郎が若返つた両親のもとで打ち出の小槌から鬼にもらつた金銀

を打ち出して話が終わるといふ形になっている。

このように比較してみると、現在に至るまでに数多の変化を遂げていることがわかる。そして今後も変化をする可能性が大いに考えられる。傍線部(C)のような小さな変化や(A)(B)(D)のように大きく変化している箇所もある。さらに、削られてしまった部分などもある。だが、変化しないのは桃太郎という人物像である。この変化というのは、ここまで見てきたような話の展開だけではなく、絵で描かれている桃太郎の姿というものも違つてきているのである。これらの変化というのは、何らかの事柄が関わっているのではないかということは推測できる。

そのように『再板』と現在伝わる「桃太郎」ものとは数多の変化が明らかにみられるが、他の赤本や黄表紙などそこに至るまでの作品群を造うことで詳細な変化の経過を知ることができるのではなからうか。

三 江戸期から明治時代の「桃太郎」もの

さて、冒頭や前章にてさまざま「桃太郎」ものが江戸期以降刊行されていることを指摘したが、実際どれくらいかの「桃太郎」ものがどのような形態で刊行されているのだろうか。

稿者の管見の限りでは、近世期で刊年がわかるもので三五作品、

近世期と慮されるが刊年未詳のものが一九作品あることが確認できた。また、明治期で三七作品あることがわかった(表二)⁵⁾。これらはおそらくその一部に過ぎず、なお多くの話が刊行されたことがこの数からも推測できよう。この調査では読み物だけでなく、絵巻や絵本番附といったものも採ることにしたが、実にさまざまと形を変えながら人々に読まれ、触れられてきたといえる。

表を見ると黄表紙が多いことがわかる。それらのタイトルというのは「後日譚」や「発端話説」などといった桃太郎がパロディ化されているような作品であることが見受けられる。これは、桃太郎話が人々に定着してきたという見方をすることができる。初めは現在でも知られているような話の展開の仕方だったが、次第に変化をしていき広がっていったのだろう。タイトルだけを見てもさまざまな「桃太郎」ものが書かれていたということが考えられる。また、脚本や浄瑠璃と類される作品もある。読み物だけではなく、演劇の題材としても扱われていたということがよくわかる。

そして、明治時代の作品を見てみると『桃太郎一代記』という作品が多く刊行されていることが目につく。したがって、著者や絵師はそれぞれ違うけれども、人気があつたために何度も同じタイトルの作品が出版されているのではないかということが考えら

れる。その中で挿絵がついたものとして一番古く、国会図書館のデータベースで確認できるものとして明治一九年刊行である網島亀吉版の『桃太郎一代記』を見てみる。国会図書館での分類としては表にあるようにお伽噺とされているが、実際に中身を見てみると合巻のような体裁になっていることがわかる。例えば、本文が次にどこに続くのかを示す記号(合印)が付されていたり絵と本文がかみ合わなかつたりということが挙げられる。また、表紙も多色刷りのものとなっている。したがって、明治期は「桃太郎」ものの作品の過渡期であると言つて良いと思う。

さらに、江戸時代は作者や絵師の名が判明している作品が多いのだが、明治時代の多くの作品は作者の名前が記されておらず、あまり重要視されていなかったかのように見える。それは、『桃太郎一代記』のように、同じタイトルが多いということからも、話の定型はある程度決まっていたことによるのかもしれない。そこに当てはめるといふ形で作られていたのではないかという見方をすることができると、そのように考えると、原話あるいは伝統的話型を尊びそのために、作者を特に設けない時期があつたのだろう。おそらく、出版元が定型的な話に合わせてそれぞれ絵だけを描いていたのではないだろうか。

また、先述した通りであるが『再板』を表二においては黄表紙

と分類しているが、原本を確認してみると実際は赤本ではないかということが言えるのである。各目録やデータベースからではわからないことが見えてくるのである。このような作品は本作以外にもあるのではないかと推測できる。したがって、原本を全て確認した状態で表を作成すると、この表とまた違ってくる可能性も大いにあるだろう。

そして、表二を見ると明らかであるが大東急文庫所蔵の『再板』は比較的早い時期に刊行されたということがわかる。したがって、桃太郎ものの基本型と考えることもできるだろう。

四 回春譚と果生譚

さて、桃太郎の誕生の仕方には回春型と果生型があるということとは既に論じた通りであるが、一体どのように変化をしてきたのだろうか。詳しく見ていきたい。

服部康子氏によると、草双紙系統の文献の大部分と口承話の一部は回春型であり、口承話の多くと明治以降の話、江戸期の一部の話は果生型であるということである。また内ヶ崎有里子氏ははじめは回春譚であったが次第に果生譚になったと論じている。さらに、名村道子氏も江戸後期には果生型が専らであったということ⁽⁸⁾を指摘している。そして、江戸期の考証隨筆である曲亭馬琴

『燕石雜志』の「桃太郎」の項によると、次のように記されている。

童の話に、昔老いたる夫婦ありけり。夫は薪を山に折り、婦は流れに沿て衣を洗ふに、桃の実一ツ流れて来つ。携へかへりて夫に示すに、⁽⁹⁾その桃おのづから破て、中に男児ありけり。この老夫婦原来子なし。この桃の中なる児を見て喜びて、これを養育み、その名を桃太郎と呼ぶほどに、※或は云ふ、老婆桃の実二ツを得て家に携へかへりて、⁽¹⁰⁾夫婦これを食べに、忽地わかやぎつ。かくて一夜に孕ことありて、男子を生めり。因みて桃太郎と名づくといへり。

※引用本文中には「割注」とあり。『燕石雜志』「桃太郎」(9)まず、「童の話」として始まる冒頭からは「桃太郎」が『燕石雜志』の当時において、子どもを対象にした読み物と馬琴が認識するものだったということが言える。そして、傍線部①では回春型、傍線部②では果生型の生まれ方がそれぞれ記されていることから、両方の型が同時期に存在していたことがわかる。

次に、この『燕石雜志』が刊行された次の年である一八二二年(文化九年)に書かれた式亭三馬の『赤本桃太郎』を見てみる。

むかしくゝあつたとさぢゝいとばゝあとあつたとさぢゝいは山へしばかりにばゝあは川へせんたくにゆきたるが大きなもゝ一つながれきたりしゆゑとり上てはんぶんくひのこりの

はんぶんはちゝいどのに（中略）又一つながれよるをもひろ
いおきける（中略）ぢゝいもばゝあも^③此もゝをくふとその
まゝとしはたちほどにわかやぎてうつくしきふうふとなる
（中略）その^④もゝふたつにわれたる中より玉のやうなる男の
子とび出る

（式亭三馬『赤本桃太郎』^⑩
再興桃太郎）

この話は、流れてきた桃を半分は食べ、残りの半分は米櫃に入
れて取っておくという話になっている。すると、傍線部^③に示し
たように桃を食べた爺と婆は二〇歳程に若返る。一方で、米櫃に
入れておいた方の桃をある日取り出してみると、傍線部^④にある
ように、桃の中から玉のような男の子が飛び出してきたという展
開になっている。したがって、回春と果生の両方の型が合わさつ
た話となっていることがわかる。

『燕石雑志』と三馬の『赤本桃太郎』は、ともに文化年間に書か
れた。つまり、文化期には遅くとも回春と果生の二つの型が存在
しており、一般的になつていたのではないかということが言える。

多くの読み物としての「桃太郎」ものにおいては、回春から次
第に果生へと変わつていく。この回春から果生への移行は、子ど
も向きに語り改められた過程であるということが指摘されている。^⑪
もともとは昔話というのは大人向きに書かれたということである

のだが、次第に子ども向きへと変化していったということなのだ。
それに合わせて誕生の仕方も変化していったということである。
ゆえに、この論に当てはめると回春型である本作は大人向きであ
るといえる。

赤本は従来、主として子ども向きの読み物であると言われてき
た。したがって、これは一般的に言われている説とは相反すると
言える。赤本から黒本・青本、黄表紙、そして合巻となるにつれて、
次第に大人向きへと変化していく読み物であるということが草双
紙研究において従来から言われてきた。しかし、「桃太郎」ものに
関して言えば、時代が降るにつれて徐々に子ども向きへとシフト
していつているのだ。これは特異性の一つではないかと言える。
従来、赤本は子ども向きであると言われてきたのだが、黒本・青
本からではなく、その手前である赤本後期くらいから大人を意圖
したものになつていったのではないだろうか。^⑫

ここまで見てきたように、読み物としては次第に変化していっ
たということはわかった。しかしながら、口承文学という形態に
関しては、どちらが先であったのかということは判断できないと
いう指摘もなされている。^⑬

このように子ども向けの読み物へと変化した「桃太郎」である
が、明治期になると教科書というかたちで教育の場でも扱われる

ようになる。では、教科書での「桃太郎」はどのように描かれているのだろうか。以下に引くのは、明治期に初めて教科書に「桃太郎」が登場した尋常小学校の一年生向けの教科書の本文である。

むかし、ぢんとはんとが有りました。ぢんは、山へくさかりに、ばゞは、川へせんたくに行きました。川上から、大きな桃が一つ、ながれて来ました。それを取りて見ますと、大そううまさうな桃でありました故、ぢんとふたりで、たべやうとて、家に持ちかへりました。ぢんが、山からかへりますと、ばゞは、直に桃を出しました。そしてふたりがたべやうと思つて居ると、^⑤桃は、二つにわけて、中から、かはゆらしいをとこの子がうまれました。

（『尋常小學讀本』卷^①）

本文を見ると、傍線部^⑤に桃の中から男の子が生まれたということが書かれており、やはり桃から誕生する果生型をとつている。そのため教育の場でおかつ子ども向けに扱うには、回春型ではないけないという理由でもあるのかもしれない。

そのことを考えるにあたっては、「桃」が表す意味を考えてみる必要があるだろう。一般的に「桃」のイメージには、「かわいらしい」といったことや「女性的」、また、桃尻という言葉があるように「お尻のようだ」などといったことが挙げられよう。「桃」は追

儼としての意味もある他に、「桃花」は経行の称、「桃源」は女陰名^⑬ということから、女性や女性器を表しているということがわかる。それは、『詩経』「桃夭」からも言える。この「桃夭」について、桃の花、果実、葉がそれぞれ女性を表現しているという指摘もなされている。^⑭さらに、それは語源からも推測できる。^⑮それゆえ、桃から子どもが誕生するというのは出産を表現しているのだと言える。

一方で回春型の方は、溝口貞彦氏の指摘において「西王母は西域（または崑崙山脈）に住む絶世の美女で、桃を食べて、不老不死になったと伝えられている。桃は、特殊的には、西王母のようなグレートマザーの表現であり、一般的には、女性のシンボルであったといえる」とあるように中国の西王母伝説の影響を受けていることがわかる。^⑯ここでは「桃」そのものが、女性の表象であると同時に老いにくいものとして考えられている。そのため、桃を食したことによつて二人は若返つたのである。次第に子ども向けになり、小学校の教科書に掲載されるにあたって果生型へと移行した理由とは、果生型のほうがより子ども向けであり、童話的といったことが考えられるからではないだろうか。

さらに、桃から誕生するということは、自らの力で切り開いて誕生したと見ることができよう。このような子どもの視点から誕生

を描いたことも、子ども向けであるという理由の一つだと言える。子どもにとつての理解のしやすさといったことも考えると果生型の方がわかりやすいだろう。大人にとつては若返りたいという願望があることから、回春型は有効かもしれないが、子どもにとつては、若返るという形よりも桃から誕生するという形の方が面白みは感じられるのではないだろうか。

また、小池藤五郎氏は「説話中の若やいで産む事には生殖の觀念が伴ふことを忌んで、西王母伝説中の桃のみ残して妊娠分娩を棄去り、植物胎生を案じ、力点を移行させ、勸善懲惡の道德観を確立し、遂に今日見るが如き説話とならしめたであろう。」といったことを論じている。以上から「桃」は女性の象徴であり老いなもの、そして生を宿す力があつた植物であると言える。

なお、桃太郎の姿に注目してみると『再板』では鬼の所へ向かう際、松居直『ももたろう』や網島亀吉版『桃太郎一代記』⁽²²⁾に描かれている桃太郎とは異なる描かれ方をしている。それは、旗を持っていないということや、はちまきをしていないということである。加えて、四ウ・五才においては初代市川団十郎の荒事姿を真似た様子で描かれていることがわかる。役者の姿を真似た姿で描くことによつて、どのような人物であるのかということが絵を見ただけでも読み取ることができる。

桃太郎の誕生の仕方が、回春から果生へなるにつれて子ども向きになったことは既に述べたが、それに伴つて顔つきもより少年風になったと見ることが出来る。現在の桃太郎はどちらかというと、少年風に描かれているイメージが強いと思う。したがつて、桃太郎の姿の固定化というのは果生型へと移り変わったことと関係していると言える。

以上のように「桃太郎」ものは、時代とともに少しずつ話が変化していき、桃太郎自身の描かれ方も変化していった。もとは大人向けに描かれた話であるが、動物などが登場することで次第に子ども向けへと移り変わり、現在では子どもの読み物として定着している。これは従来草双紙の定義と逆行しているため、興味深い点である。勸善懲惡や立身出世といったことから子どもの読み物として向いており、好まれたのかもしれない。

この草双紙と「桃太郎」もの関係を図示すると次のようになる。

一般的な説

赤本——黒本・青本——黄表紙——合巻
 (子ども向き) ————— (大人向き)

「桃太郎」もの

赤本——黒本・青本——黄表紙——合巻——明治期読み物

(大人向き)

(子ども向き)

(回春譚)

(果生譚)

おわりに

「桃太郎」という話は、現在の私たちにとって身近な昔話作品の一つである。長い間さまざまに形を変えながら人々に親しまれてきた。口承文学から読み物、教科書にも取り上げられ、さらに唱歌や演劇と幅広く用いられている題材である。

では、人々になぜ長い間親しまれてきたのだろうか。それは、桃太郎という人物や作品自体が持つ力強さが関係しているのではないかと考えられる。黄表紙期などに見られるパロディ化されたものは断言できないが、『再板』や三馬『赤本桃太郎』、『尋常小學校讀本』に描かれているような現在一般的となっている桃太郎の基となつているような話には、勧善懲悪や立身出世といったものが含まれていることは先述した通りである。だが、これこそがどの時代に描かれた「桃太郎」ものでも共通している要素なのではないかと考える。このような要素が長い間好まれた理由の一つであると言える。しかし、これ以外にも理由はあるかもしれない。

本稿では、他の桃太郎作品について誕生の部分を中心にした本

文は見てきたが、草双紙を読み解く上で重要である挿絵の描かれ方といったことには十分に触れることはできなかった。また、唱歌や演劇での桃太郎の描かれ方についても論じることができなかった。それについては、別稿に譲ることとする。

注(1) 内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』(一九九九年二月、三弥井書店、三七六頁)

(2) 鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集』江戸篇(一九八五年七月、岩波書店、五七頁)にて「殿様が、お伽衆に話をさせている状況を子どもで描いたかと思われる」と記述。

(3) 鈴木紫三編注『耳袋』一卷(一九七二年三月、平凡社、五七―五八頁)

(4) 朝倉治彦校注『東海道名所記』(一九七九年一月、平凡社、二〇三頁)

(5) 江戸時代は『補訂版 国書総目録』(一九九〇年、岩波書店)山崎麗『改訂 日本小説書目年表』(一九七七年一〇月、ゆまに書房)、明治時代は「国立国会図書館蔵書検索」を主とし適宜「江戸東京博物館収蔵品検索」、「早稲田大学古典籍総合データベース」、服部康子『桃太郎昔話』について『叢』一卷(一九七九年四月、東京学芸大学国語教育学科国文学第三研究室)を用いた。

(6) 服部康子『桃太郎昔話』について『叢』(一九七九年四月、東京学芸大学国語教育学科国文学第三研究室、二七頁)は、桃太郎の誕生の仕方について「川で拾った桃から生まれるものと、



図1 (1才)



表紙



表紙裏題箋



図2 (1ウ・2オ)



図3 (2ウ・3オ)



図4 (4ウ・5オ)

小池正胤・叢の会編『江戸の絵本―初期草双紙集成』IV(二九八
七年、国書刊行会)より

その桃を食べて若返った爺婆から生まれるものがある。□承話の多くと明治以降の話、及び江戸期の話の一部(『燕石雑志』、『童話長篇』)に示されている桃太郎話などは、前者であり、本書をはじめとする草双紙系統の文献の大部分と□承話の一部(埼玉県狭山市、香川県仲多郡佐柳島)が後者である」と指摘している。

(7) 注1に同じ。七八頁。「赤本から黄表紙期の作品は「回春型」であるが、合巻期に至ると「果生型」の桃太郎作品もあらわれ、豆本においても「果生型」のものが見られる」と指摘している。

(8) 名村道子「江戸時代の桃太郎」『国文』(一九六三年七月、お茶の水女子大学国語国文学会、五六頁)は「梅辻規清(瑞島園斎守)の書いた『雑廻字計木』には、勝々山、舌切雀、猿かに、浦島太郎、竹篋太郎、花咲翁、桃太郎の七つの童話の考証が載せられている。この中で、桃太郎は、回春型をもって紹介されている。次いで、馬琴の『燕石雑志』では、果生型となり、或は言ふとして、回春型も付け加えている。(中略)下って、黒沢翁満の『童話長篇』は、果生型を採用している。江戸後期には、国学者の間で、果生型が専らであったことがわかるのである」と指摘している。

(9) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第一九卷『楓軒偶記 燕石雑志』(一九九五年三月、吉川弘文館、四四六頁)

(10) 国立国会図書館デジタルコレクション『伊達娘常陸小杉』三巻所収

(11) 滑川道夫『桃太郎像の変容』(一九八一年三月、東京書籍、序IV頁)は「江戸期の文献では回春型が先行しているようであるが、明治に近づくにしたがって果生型に移行する。これは子どもが民話の聞き手として参加することが多くなったために無邪気な子

ども向きに語り改められてきた過程を示すものだろう。昔噺は、はじめおとな向きのものであったが、鬼退治や動物が登場する興味から子どもに好かれたのだろう」と指摘している。

(12) 今でこそ昔話は、子ども向けの読み物であると思われるが、もともとは大人を意識した読み物であったということである。また、加藤康子「江戸期子ども絵本の魅力―赤本『是は御ぞんじのばけ物にて御座候』をめぐって」『梅花女子大学文化表現学部紀要』一(二〇〇四年一月、梅花女子大学文化表現学部、四二頁)は、江戸期子ども絵本の特徴として子どもも読んでいた可能性はあるが、「子どもだけのため」「子ども向け」ではないとした上で「おとなと子どもとの関係」ということが重要な課題の一つであると指摘している。

(13) 注1に同じ。五頁。「江戸期において、回春型が文献的に先行し多くおこなわれていたとしても、□承の説話形態にあつては、どちらが原型的かということは容易に判定できない」と指摘している。

(14) 国立国会図書館デジタルコレクション所収

(15) 白鳥庫吉『白鳥庫吉全集 日本上代史研究下』第二巻「桃太郎の話(講演要旨)」(一九七〇年二月、岩波書店、一二四頁)には、追儼としての「桃」について「其の儀式の方法を見る時は、確かに中国より採用せられたるものにして、本邦固有のものに非ざること明かなり。追儼の儀式は『礼記』、『周礼』に明記せらる。鬼を祓ふ習慣は世界に浸透し、支那より採用せられたるものにして、桃が鬼を祓ふmagical forceを有すと云ふ支那の思想に基づきて此の儀式の起こりたること疑ひなし。」と論じている。

(16) 中野栄三『江戸秘話事典』「桃」の項目(一九六三年、雄山閣)

(17) 白川静『中国の古代歌謡 詩經』(二〇〇二年一月、中央公論新社、一五六頁)

桃之天天 灼灼其華 桃の天天たる 灼灼たるその華
之子于歸 宜其室家 この子ここに帰ぐ その室家に宜しか
らむ 第一章

桃之天天 有蕢其実 桃の天天たる 實たるその実あり
之子于歸 宜其家室 この子ここに帰ぐ その家室に宜しか
らむ 第二章

桃之天天 其葉蓁蓁 桃の天天たる その葉 蓁蓁たり
之子于歸 宜其家人 この子ここに帰ぐ その家人に宜しか
らむ 第三章

(18) 王秀文「桃の民俗話」そのシンボリズム(その二)、『日本研究』一九(一九九九年六月)、国際日本文化研究センター、二二六頁)

は「桃天」の詩はこのように、若い娘の結婚を祝福する意味をもつものであるが、桃の花を若くて美しい娘の容貌に、桃の果実を健康で豊満な娘の体に、そしてうつつそうとした桃の葉を婚家の繁盛、すなわち結婚によつてもたらされたであろう娘の生殖力に、それぞれたとえて謡っているのである。容貌の美しさ、肉体の豊満さ、そして生産力を一体のものとして、若い女性の具えている成熟した性的魅力を、余すところなくありありと表している」と指摘している。

(19) 注18に同じ。一四四―一四五頁。「モモ」と発音する言葉に「桃」「股」「百」があることを指摘し「股」と「桃」の二語の語源を列挙した上で、この二語は「古代日本人の意識において「マロマロ」、「モリモリ」、「モ々」などと性的に結びついている」と指摘。そして「桃」は「百」とも意味的に通じることを指摘し、

「股」イコール女性性器、「百」イコール生殖力であり、これらの機能を一身にした「桃」はまさに生命の旺盛さのシンボルとなるのである」と述べている。折口信夫「桃の伝説」『折口信夫全集』第三巻(一九六六年、中央公論社、五八頁)もこれを認めている。

(20) 溝口貞彦「桃太郎の話」『二松学舎大学論集』(二〇〇八年三月、二松学舎大学文学部、二六頁)は「古代中国には、桃の神様である西王母の伝説がある。西王母は西域(または崑崙山脈)に住む絶世の美女で、桃を食べて、不老不死になったと伝えられている。桃は、特殊的には、西王母のようなグレートマザーの表現であり、一般的には、女性のシンボルであったといえる。桃の節句が女子の祭とされたのも、それと関係があるだろう」と指摘している。

(21) 小池藤五郎「記録された桃太郎古説話の研究(下)」『国語と国文学』一一巻三号(一九三四年三月、至文堂、八二頁)

(22) 国立国会図書館デジタルコレクション所収
(二〇一六年度卒業 博士前期課程在学中)